

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32606

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370029

研究課題名(和文)ガイウス学派におけるプラトン解釈およびその自然観の解体と再生

研究課題名(英文) Re-examination of the School of Gaius' Concept of Nature, its Transformation according to their Interpretation of Plato

研究代表者

金澤 修 (Kanazawa, Osamu)

学習院大学・文学部・講師

研究者番号：60524296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：1)中期プラトン主義のプラトン解釈 これについては、アルピノス『プラトン対話篇入門』をアルキノオス『ディダスカリコス』等と比較し、「バルメニデス」等の論理学的作品が他作品読解の道具と位置付けられていることを明らかにした。2)中期プラトン主義の宇宙論とその語彙 これについては、アイカヌム出土パピルス片のアリストテレス的用語の検討によって、このテキストが後代のプラトン主義綱要と語彙的に類似していることを明確にした。3)アプレイウスの思想 これについて研究分担者が従来とは異なった位置付けを提示した。さらに代表者と分担者は歴史研究者を含めた3人の外部研究者を招き研究会を開催した。

研究成果の概要(英文)：Middle Platonists' ways of interpretation of Plato. Their terms concerned with peripatetics. Apleius' concept of the Nature. On the first topic, research representative compared the way of reading of Plato adopted by Albinus, pupil of Gaius, with Alcinius' and Diogenes Laertius' one. The point to examine is whether they gave the special role to Plato's logical works as Parmenides. As the consequence, it became clear that only Albinus regarded the works as instrument. This fact suggests that he and the master employed the peripatetics' way. On the second, research representative dealt with the papyri of the Hellenistic period found at Ai-Khanoum, which has been argued on its character. The study made clear the vocabularies were similar to those used by middle Platonists at the Roman time. On the last, member of the research and research representative held one congress inviting three scholars.

研究分野：古代ギリシア・ローマ哲学史

キーワード：中期プラトン主義 比較思想 プラトン 新プラトン主義 アリストテレス アプレイウス

1. 研究開始当初の背景

本課題のタイトルは「ガイウス学派におけるプラトン解釈およびその自然観の解体と再生」であるが、研究の中心は、かつて「ガイウス学派」なる構想が主張された際に着目された、後述するアルピノスやアルキノオスといった中期プラトン主義者たち、中でも紀元後二世紀の思想家たち、とりわけアプレイウスである。ヘレニズムおよび古典後期と言われるこの時代の思想についての研究は、世界的に見れば近年盛んになりつつある。とはいうものの、アルグラらによるケンブリッジヘレニズム哲学史(*The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, ed., by Algra et al., Cambridge University Press, Cambridge 1999)、ガーソン編集のケンブリッジ古典後期哲学史(*The Cambridge History of Philosophy in Late Antiquity*, ed. by Gerson, L.P., Cambridge University Press, Cambridge, vol.1, 2, 2010)などはいわゆる概説的な哲学史であり、本課題のような特殊研究ではない。もちろんその時代の中期プラトン主義研究については、ディロンを上げるべきであるが(Dillon, J., *The Middle Platonists*, London, 1977, Revised, 1996.)、ディロン自身のもも含め、その後の重要な研究成果を反映していないため、すでに古典の域である。その点ではアルピノスやアルキノオスとのプラトン解釈を詳細に検討したゲランソン(Göransson, T., *Albinus, Alcinous, Arius Didymos*, Göteborg, 1995)が特筆に値するものの、その後の研究が続いておらず、更新の必要があるだろう。上記プラトン主義者と共に本課題が扱うアプレイウスについては、ヒルトン・ハニクラによる翻訳を始め(*Apuleius Rhetorical Works*, translated by Harrison, S.J., Hilton, J.L., Hunink, V. J. C., Oxford, 2001.)サンディ(Sandy, G., *The Greek World of Apuleius*, Brill, 1997.)、ハリソン(Harrison, S. J., *Apuleius: A Latin Sophist*, Oxford: Oxford University Press, 2000)などが見られ、状況を呈してはいたものの、それらは基本的に哲学思想を中心とするものではない。しかしながら、アプレイウスの自然観、とりわけプラトン作品に現れるダイモニオン(或いはダイモン)論を含めた自然観および宇宙論は、中期を含めたプラトン主義の伝統という観点でも興味深い上に、後代のキリスト教的自然観との関連でも非常に重要であるものの、上述のように研究は進んでいない。そのような状況のもとで本課題は、「ガイウス」という言葉に象徴される中期プラトン主義者や、その同時代のアプレイウスによるプラトン思想の読解方針の確認と、それによってもたらされる従来の自然および宇宙観の解体、再生という哲学思想的な観点による研究対象へのアプローチを行なった。

2. 研究の目的

背景の説明に際して記したが、本研究が扱うのは紀元後の中期プラトン主義者、とりわけ一〜二世紀の中期プラトン主義者である。彼らの自然観、及び宇宙論に認められるプラトン作品の読解姿勢の確認とその新たな展開、そしてそれに伴う自然観の変容と再生を検討することが本研究の目的である。

さて中期プラトン主義の自然観察宇宙論を再検討するという事は、彼らの思想の間でどのような異同があり、それは何に基づいた結果なのか、或いはプラトン主義以外のどのような思想と関係した解釈なのかという思想的・哲学的観点について研究を行うことを意味している。これは同時に、本課題が関わる「ガイウス学派」の実質の検討でもある。というのも、確かにディロンが提唱した「ガイウス学派」は、アルピノスとアルキノオスが別人であること、さらにアルキノオス『ディダスカリコス』とアプレイウス『プラトンとその教説』での類似点が見かけ上のものに過ぎないことが哲学史研究上で一般的となり、当時の構想のままでは維持し得ないことが了解されている以上、以前に比べて研究対象としての価値が低いと思われがちである。だが、ディロンが主張した規模での「ガイウス学派」が実在しなかったとは言え、弟子アルピノスによるガイウスのプラトン主義解釈を記した『エイサゴゲー』も、アルキノオスによるプラトン主義解説書『ディダスカリコス』も、さらにほぼ同時代のアプレイウスの上記書もまた存在している以上、これら三つの要綱が、或いは後述するディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』のプラトン関係の箇所も含め、それぞれがプラトン解釈においてどのような関係になっているのかを検討することは、上述の学派構想の頓挫とは関係がなく、むしろ重要な点でもある。本課題は、このような観点の基で彼らのプラトン解釈を個別に、あるいは比較検討することによって、上記中期プラトン主義思想家の思想上の独自性を、とりわけプラトン作品の読解手法とそれによるプラトン思想の変容を明らかにすることを研究目的としている。これに関連してアプレイウスについて言えば、研究の目的は、その思想の検討を通して、文学作家として、あるいは第2次ソフィスト思潮の枠組みの中にあるソフィストとして評価されがちな人物像を思想を描いた哲学者として、とりわけ中期プラトン主義者として描きだすことにある。これは本課題が取り上げるまでは必ずしも一般的に認められることではなかったが、ハリソン(Harrison, S.J., *Framing Ass*, Oxford, 2013)、フレッチャー(Fletcher, R., *Apuleius' Platonism*, Cambridge: Cambridge University Press, 2014.)、リーなどによる研究(*Apuleius and Africa*, ed. by Lee et al., Routledge, 2014.)、モレッシーニ(Moreschini, C., *Apuleius and the Metamorphoses of Platonism*, Brepols, 2015.)などの研究からもわかるように、この

数年、海外でも多く認められるものであり、その意味で本課題は世界的な研究動向に遅れをとらないどころか、先端を歩んでいたと言えるだろう。

3. 研究の方法

本研究が扱う対象が哲学思想であるため、紀元後の中期プラトン主義者についても、またアプレイウスについても、その作品を読解することが、本研究の中心的な方法である。中期プラトン主義者について、とりわけ「ガイウス学派」構想との関連で研究対象を挙げるならば、既に言及したアルピヌス『エイサゴゲー』、アルキノオス『ディダスカリコス』、さらに彼らと同時代でプラトン主義についてまとめているディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』である。本課題では、それらに認められるプラトン解釈との異同について、テキストの読解を中心に研究を行った。これはとりわけプラトンの論理学的性格の作品の位置付けを巡る用語や術語上の比較考察であった。この観点に絞ったのは、本研究で彼らと共に研究対象となったアプレイウスに『命題について』なる、研究者によって真偽の判断は分かれるものの、アリストテレス論理学とストアは論理学について扱った論理学を概説した作品が残っており、その限りで二世紀当時の哲学における「論理学」あるいは「論理学的作品」の位置付けを比較考察する必要性があったからである。アプレイウスについては、彼の哲学思想家の側面を代表する各作品、『ソクラテスの神について』、『プラトンと彼の思想について』、『弁明』、また上記『命題について』を本課題の研究の対象とした。これらは全てラテン語によるが、國方栄二による翻訳『プラトンと彼の思想について』(アルピヌス他『プラトン哲学入門』、京都大学出版局所収)、水落健二による翻訳『命題について』(『新プラトン主義研究』第5号所収)以外には翻訳は存在せず、そのため上記二作品以外は、日本語への翻訳が本研究の基盤として進められた。けれどもこれはボージョーのテキストおよび翻訳(Beaujeu, J., *Apulée: Opuscules philosophiques et fragments*, 1973, Les Belles Lettres, Paris.)を批判的に参照しながらの検討となる。アプレイウスの自然観・宇宙論を検討する際に、上記著作以外に重要な視点を提供するものとして、擬アリストテレス『宇宙について』のアプレイウスによるラテン語訳が挙げられる。この作品は、アリストテレス自身によるものではないが、アリストテレス主義宇宙論を要約的に述べたものであり、古典時代の終焉とともに、アルメニア語、シリア語、アラビア語に訳され、イスラム神学の構築に多大な役割を果たした作品である。問題は、古典時代の盛期と言っても良い2世紀に、なぜプラトン主義者アプレイウスがなぜラテン語に訳したか、そして原点との異同はどのよ

うな点に認められるのか、である。これについては、アプレイウスによる翻訳とギリシア語原典との比較によって研究を進められた。

4. 研究成果

本研究の成果は以下のとおりであり、それぞれ研究を代表する観点に分けて記載する。なお、研究成果を示す際に、学会・研究会における発表と雑誌論文での研究発表とは内容に密接な関係があるために、以下では両者を「成果」の一端として併せて示すことにする。また翻訳についても、作業過程において本課題が扱う研究対象が常に比較され、それは当該作品の解説においても触れられている。

(1)「中期プラトン主義について、とりわけ「ガイウス学派」について」

研究代表者によって2014年9月20日に大阪府立大学で開催された新プラトン主義協会第21回大会で「アルピヌス『プラトン対話篇入門』に於ける「論理的」作品の位置づけについて」というタイトルで研究発表が行われた。これは「アルピヌス『エイサゴゲー』に於ける「論理学的作品の位置づけを巡ってアルキノオス、ディオゲネス・ラエルティオスとの比較を通して」というタイトルで2016年3月に発行された新プラトン主義協会編『新プラトン主義研究 第15号』に掲載されている。研究代表者は、このガイウスの思想を唯一伝える短編をアルピヌスと同一人物と解されていたアルキノオス『ディダスカリコス』、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』など、同時期の中期プラトン主義者と比較し、それによって、ガイウス学派では「パルメニデス」等の論理学的作品が、他のプラトン作品を読解するための、いわば道具のごとき扱いを受けている点、そしてそのような位置づけは用語法から「アリストテレス全集」の影響を受けている可能性、そしてそれがかかる学派の独自性とでもいふべき点であることを明らかにした。

(2)「中期プラトン主義自然観および宇宙論と展開」について

研究代表者によって、2016年6月4日に大阪府立大学で開催された日本西洋古典学会第67回大会で「アイハヌム出土断片における「原因」を巡って」というタイトルで研究発表が行われた。これは「アイハヌム出土パピルス断片における「不動なる第一の原因」について」というタイトルで2017年3月に岩波書店より出版された『西洋古典学研究』LXV号に掲載されている。かかる論文において扱われたのは、プラトンのイデア論と宇宙論であり、研究代表者は、プラトン主義の宇宙論が地中海世界を越えて、いわゆるインド文化圏にまで達していたことを報告し、さらにその内実がアリストテレス『形而上学』に代表されるイデア論批判を承けたものであり、数百年後のプラトン主義綱要、例えば上記アルキノオス『ディダスカリコス』などと用語の上で類

似している点などを明確にし、その限りで、このパピルス片の作者がアリストテレス本人、あるいはそれに近い人物とする従来の研究とは異なった結論を提供するものである。(3)「アプレイウスおよび彼の自然観」について

研究代表者および研究分担者によって行なわれた。これについては、第一に研究代表者による「2015 アリストテレス全集『宇宙について』、岩波書店、2015年」の翻訳が挙げられるだろう。既に述べたように、上記作品は、アリストテレスにはよらないが(それゆえ一般には、作者は擬アリストテレスと表記される)、ペリパトス派を含めた古代の自然観および宇宙論を端的に示しており、内容上も重要である。しかしながら今回の研究にとって意味を持つのは、かかる作品がアプレイウスによって、古典古代にラテン語訳されたことである。それ故、プラトン主義者であるアプレイウスがどのような点を評価したために、当該作品を選んだのか、また古典時代にあつてどのような理由のためにラテン語への翻訳を行なったのか、またその翻訳は当該作品のテキストクリティックにいかなる影響を与えているかなど、多岐に渡った検討が、かかる作品の翻訳作業を通じて行われた。また上記の問題点については、研究代表者と研究分担者が中心になって2017年3月に開催したシンポジウムでも検討された(後述)。

上記の観点について研究分担者によって2016年9月18日に国際基督教大学で開催されたギリシャ哲学セミナー「第20回共同研究セミナー」において「アプレイウスによる哲学のすすめ」というタイトルで研究発表が行われた。これは2017年3月にギリシャ哲学セミナー編『ギリシャ哲学セミナー論集』Vol. XIVに「アプレイウスによる哲学のすすめ」という同タイトルで収録されている。当該研究において研究分担者は、近年のアプレイウスの研究動向について精査を加えた上で、作家、或いはソフィストとしてのみ位置付けられていたアプレイウスの評価について、それがどのような意味で不足しているのか、従来の研究の不備のみならず、そのような動向がなぜ発生したのか、また哲学思想的な観点とそれらの観点を分断してアプレイウスを評価することがなぜ発生したのか、その理由についても明確な指摘を行なっている。このような研究は、本課題が研究を開始して以来の世界的な傾向であり、日本の哲学史研究においても不十分な領域であったのは既に述べた通りであり、その意味では、研究分担者の成果は十分な評価に値するものだと言えよう。

上記の研究成果のほかに、特筆すべきものとして、以下の二点を挙げる事が出来よう。一つ目としては、研究代表者および研究分担者は、2016年7月4日から8日にかけて、ブラジル・ブラジリアで開催された「国際プラトン学会」(International Plato Society)

第XI回大会に参加したことである。これは本研究の中心的課題である中期プラトン主義の国際的な研究者との相互の研究情報の交換と、その進展を確認することが出来たことはやはり成果であるといつて良いだろう。二つ目として、上記(3)の観点、および本課題の総括として、2017年3月4日に、研究代表者と研究分担者は学習院大学において「ガイウス学派におけるプラトン解釈およびその自然観の解体と再生」と題したシンポジウムを開催した。当該シンポジウムでは、本課題が目的としていた、中期プラトン主義、とりわけアプレイウスの思想という側面について哲学研究者のみならず、歴史的事実についても歴史研究者と検討を行い、学際的な観点からも十分な研究が行われた。研究代表者および研究分担者以外に、その三名と共に各自の発表タイトルを示せば以下の通りである。

金澤修(研究代表者・学習院大学)「アプレイウスはなぜ「宇宙について」を翻訳したのか」

小島和男(研究分担者・学習院大学)「アプレイウス研究の今」

講演

島田誠(学習院大学)「ローマ帝政中期の北アフリカの知識人」

近藤智彦(北海道大学)「誰がライオスの運命を弄んだのか」

本間俊行(北海道大学)「アプレイウスは哲学者かソフィストか」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

小島和男

「アプレイウスによる哲学のすすめ」
ギリシャ哲学セミナー編『ギリシャ哲学セミナー論集』Vol. XIV pp.35-48.2017年3月

金澤修

「アイハヌム出土パピルス断片における「不動なる第一の原因」について」『西洋古典学研究』LXV号 pp.60-70.2017年3月、岩波書店

金澤修

「アルピノス『エイサゴゲー』に於ける「論理学的作品の位置づけを巡って アルキノオス、ディオゲネス・ラエルティオスとの比較を通して」

新プラトン主義協会編『新プラトン主義研究第15号』pp.51-66.2016年3月

〔学会発表〕(計4件)

小島和男

「アプレイウスによる哲学のすすめ」、「ギリシャ哲学セミナー 第20回共同研究セミナー」、2016年9月18日、国際基督教大学

金澤 修

「アイハヌム出土断片における「原因」を巡って」日本西洋古典学会第 67 回大会、2016 年 6 月 4 日、大阪大学

金澤 修

「プロティノス・コロキウム、
「VI-1(42)-VI-3(44)有るものの類について
1-3」における数学対象の成立に関わる箇所
を中心にして」新プラトン主義協会第 22 回
大会、2015 年 9 月 19 日、中央大学

金澤 修

「アルピノス『プラトン対話篇入門』に於ける
「論理的」作品の位置づけについて」新プ
ラトン主義協会第 21 回大会、2014 年 9 月 20
日、大阪府立大学

〔図書〕(計 4 件)

金澤 修 (金子善彦・伊藤雅巳・濱岡剛と
共訳)

アリストテレス『動物誌』下、岩波書店、2015
年 12 月

金澤 修 (金子善彦・伊藤雅巳・濱岡剛と
共訳)

アリストテレス『動物誌』上、岩波書店、2015
年 10 月

金澤 修 (土橋茂樹・納富信留・栗原裕次
と共編)「ギリシア哲学とは何か」『内在と超
越の関』pp.39-54、知泉書簡、2015 年 7 月

金澤 修

アリストテレス『宇宙について』、岩波書店、
2015 年 3 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金澤 修 (KANAZAWA Osamu)

学習院大学・文学部・講師

研究者番号：60524296

(2) 研究分担者

小島和男 (KOJIMA Kazuo)

学習院大学・文学部・准教授

研究者番号：80383545